

人の性格というものは変わるものだろうか。私はよく「性格は変わらないが、行動は変えられる」と言っている。その一方で、性格は変わる、変えられるという考えや教えに出会うと、「そうなのだろうか」と揺さぶられる。今回も、かなり揺さぶられた。こんな話がある。

死を迎える前に自分の魂が美しい魂になったかどうかは誰にもわからないが、それを検証する方法が一つだけある。それは何かというと、魂を美しく磨きたいと常日頃考えて行動していると、人柄が変わってくるはずなのである。善き思いを常に心に抱き、善き行動をしていれば、性格が変わるはずなのである。

人間というものは、ろくでもない妄想を抱くものである。それを自分で「それはいかん、それはいかん」と戒めながら、正しい方向へ、正しい方向へと自分を向けていく毎日を送っていく。常にそういう修正をしていくと、自然とそれが魂を磨く、心を磨くという行為になっている。

その結果として、性格、人格が変わっていくわけである。つまり、性格に影響を及ぼさないような思いでは意味がないのである。性格は生まれたときから一生変わらないものではない。心の中でどういう思いを抱いているかによって、その人の性格は変わっていくものである。

だから、だんだん年を重ねるにしたがって、「あの人はいい人だね。若い頃とはだいぶ違って、いいお人になったな」と言われたとすれば、そのことが実は、少しは美しい魂になっていった証拠なのである。

人柄を見れば、魂が美しいものになったかがわかるのである。作家の芥川龍之介のこんな言葉がある。「運命は、その人の性格の中にある」また、文芸評論家の小林秀雄はこう言っている。「人は性格に合ったような事件にしか出くわさない」

善きことを思い、善きことをすれば、いい結果が生まれるが、そういう思いをずっと抱いて行動していると、それはまさにその人の性格を形づくっていくことになる。小林秀雄の言うように「人は自分の性格に合った事件にしか遭遇しない」のだとすれば、「私は大変不幸な事件に巻き込まれています」というのは「あなたの思いが呼んだのですよ」「あなたの性格がそれをつくったのですよ」という言えるわけである。

二人の先人の言葉は、性格が変わっていくまでの強い思いを抱き、毎日毎日、自分の思いを修正しながら、善き思いに変え、善きことをする方向に変えていくことが大事なのだと言うことを如実に表している。

私の場合、なぜ、自分の性格は変わらないと考えるようになったのか。それは、性格が変わるほどの強い思いがなかったからだとわかった。性格が変わるほど、常日頃考えているかということ、そんなことはない。思いが弱かっただけである。中途半端な行動で、性格は変わらないと結論づけていたことを思い知らされた。

これからは、「若い頃とはだいぶ違って、いい人になったな」と言われるように、今一度、覚悟を決めて魂を美しく磨いていこうと思う。